

# On the Original Form of the “Tathāgatāyuspramāṇa” Chapter of the Lotus Sutra

Ken’ichi MAEGAWA

Comparing two Chinese translations and the Sanskrit text of the *Lotus Sutra*, there are many differences. In the paper, we focus on the “Tathāgatāyuspramāṇa” Chapter of the Sanskrit *Lotus Sutra*, which corresponds to the 15th chapter of Dharmarakṣa’s translation and the original form of Kumārajīva’s translation. There are two differences between the 15th chapter in Dharmarakṣa’s translation and the two other texts. The first one is found in the part after the parable of a good medicine. In this part, the interpretation of the parable is told. But the other two texts lack an interpretation such as this. The second one is the closing sentences in the end of that chapter, which are found in the beginning of the next chapter (“Puṇyaparyāya”) of the two other texts. In accordance with the general tendency of the Lotus Sutra, we can assume that Dharmarakṣa’s translation keeps the original form of the “Tathāgatāyuspramāṇa” Chapter. If so, then there is another possibility that the 15th chapter is originally an independent sutra and was added to the older form of the *Lotus Sutra*.

# 法華經寿量品の原初形態についての試論： 『正法華經』からの検討

前 川 健 一

## 1 問題の所在

竺法護訳『正法華經』「如来現寿品」は、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』の「如来寿量品」、梵本 *Saddharmapuṇḍrīka* の “*Tathāgatāyus-pramāṇa*” に相当する。内容はほぼ同じであるが、比較すると、後二者には見られない部分が短文ではあるものの存在する。本稿では、『正法華經』にのみ見られる箇所を手掛りとして、寿量品の本来の意図や法華經における位置付けについて検討してみたい<sup>1)</sup>。

## 2 『正法華經』のみに見られる箇所

『正法華經』「如来現寿品」と『妙法蓮華經』「如来寿量品」を比較してみると、特に大きな違いがあるのが、以下の二箇所である（梵本<sup>2)</sup>は『妙法蓮華經』に対応）。

『正法華經』「如来現寿品」（内容に即して適宜、改行した）

(A) 仏語諸族姓子「如是医者、善権方便、令子病愈。寧可誹謗。彼医所処為不審乎」。諸菩薩白仏言「不也、世尊。不也、安住」。

仏言「吾從無数不可計限億百千劫、發無上正真道意、懃苦無量每行権便、

---

1) 以下、「」や『』のない表記は、梵本や特定の訳に限定されない、法華經そのもの・品そのものを指示する。便宜上、品名は『妙法蓮華經』のものを使用するが、如来寿量品については、一般的な略称である寿量品を使用する。

2) 梵本の本文は、ケルン・南条校訂本 (KN) により、必要に応じて同書の頁数を付す。

示現教化發起群生。

①《其父医者、謂如来也。

諸兒子者、謂五道生死人也。

父他行而不在者、謂如来未出於世。

諸子入城服毒藥婉轉者、謂在三界三毒所縛、婉轉五道、不能自濟。

父聞來還、謂仏如来行大悲哀、見三界人、或流五趣、不能自出。故現世間、  
広説経法、開化黎庶。

服藥病愈、謂発無上正真道意、立不退転、無所從生。或得声聞縁覚乘、  
不至究竟。

視葉形色香味不肯服者、謂六十二見諸墮邪者。

見父年老留藥教子捨之去者、謂諸黎庶疑受道教、故現滅度。留諸経法、  
以教後世。四輩弟子諷誦学問。思仏功德、発大道意。或得羅漢、或得縁覚。

仏見如是、復還出世。一切衆生皆是吾子。》

(B) 諸族姓子。如来行権、非徒虚妄」。

於是、世尊、欲重解誼、顕揚其事、而歎頌曰（大正9巻114b11-c02）

『妙法蓮華經』「如来寿量品」

(A\*) 「諸善男子。於意云何。頗有人能説此良医虚妄罪不」。

「不也世尊」。

仏言「我亦如是。成仏已来。無量無辺百千万億那由他阿僧祇劫。為衆生故。  
以方便力言当滅度。

(B\*) 亦無有能如法説我虚妄過者」。

爾時世尊欲重宣此義。而説偈言（大正9巻43b06-11）

これは、寿量品で偈（いわゆる「自我偈」）に入る直前の部分であり、比較するとAとA\*、BとB\*が対応する一方、《 》内の部分が『妙法蓮華經』では欠けていることが分かる。

次に相違があるのは、偈が終わった後の箇所、「如来寿量品」では偈によっ

て品そのものが終わるが、「如来現寿品」では偈の後に次の一文がある。

- ②世尊說是如来寿限時、則無央数不可思議衆生、皆獲利誼解脱至道（大正9卷115b07-8）

この一文は、『妙法蓮華經』「分別功德品」の冒頭部に対応する（梵本も同じ）。

爾時大会聞仏説寿命劫数長遠如是、無量無辺阿僧祇衆生得大饒益（大正9卷44a6-7）

一方、『正法華經』の対応品である「御福事品」の冒頭には、この部分がない。つまり、『正法華經』では寿量品の末尾とされている一文が、『妙法蓮華經』・梵本では、分別功德品の冒頭に位置していることになる。

### 3 寿量品の末尾表現の検討

以上見た『正法華經』「如来現寿品」と『妙法蓮華經』「如来寿量品」との相違のうち、便宜上、②から検討してみたい。

この場合、もともと『正法華經』のように②の文は寿量品の末尾にあったのか、『妙法蓮華經』や梵本のように分別功德品の冒頭にあったのが本来の形であったのか、ということが問題になる。漢訳だけを見ると、どちらかに決することは難しいが、梵本を参照するなら、前者の可能性の方が高いように思われる。

梵本の分別功德品の冒頭は、以下のようになっている。

asmin khalu punas tathāgatāyuspramāṇanirdeśe nirđiśyamāne 'prameyāṇām asaṃkhyeyānām sattvānām arthaḥ kṛto 'bhūt. atha khalu bhagavān maitreyaṃ bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ āmantrayate sma. (KN p.327)

『妙法蓮華經』「分別功德品」：爾時、大会聞仏説寿命劫数長遠如是、無量

無辺阿僧祇衆生得大饒益。於時、世尊告弥勒菩薩摩訶薩（大正9卷44a06-08）

『正法華經』「御福事品」：爾時世尊告弥勒大士（大正9卷115b16）

梵本27品のうち、序品・化城喻品<sup>3)</sup>・分別功德品を除く24品では、*atha khalu*で始まっている。一方、品末に、先の②のような、聴聞の功德を説く文がある品は、（梵本の順に挙げると）陀羅尼品・藥王菩薩本事品・妙音菩薩品・觀世音菩薩普門品・妙莊嚴王本事品・普賢菩薩勸発品の7品に上る<sup>4)</sup>が、いづれも聴聞の功德を説く文は *asmin khalu punaḥ* で始まっている。ここから考えると、*asmin khalu punaḥ* を冒頭に置く現行梵本およびそれに対応する『妙法蓮華經』の分別功德品は異例であり、『正法華經』のように寿量品末尾に②の文がある方が自然だと言える。

『正法華經』の②の文と、『妙法蓮華經』・梵本の分別功德品冒頭の文を比較すると、②の「利誼」が、*artha*・「大饒益」に対応することが分かるが、②の「解脱至道」にあたる言葉がない。

『正法華經』の「至道」の用例を見ると、以下の二つの用例が参考になりそうである。まず、一つは、「善権品」の以下の例である。

『正法華經』「善権品」：何故説世 而有五事 或有衆生 懷毒求短  
貪欲愚瞶 而好誹謗 如是倫品 不尚至道（大正9卷73a13-15）

*kiṃ kāraṇaṃ pañcakaṣāyākāle kṣudrās ca duṣṭās ca bhavanti sattvāḥ /*  
*kāmair ihāndhikṛta bālabuddhayo na teṣa bodhāya kadāci cittam //*(2.141, KN p.58)

- 
- 3) 化城喻品は、何らの導入句なしに、釈尊の言葉で始まる。これは經典の形式としては異例である。後考を期したい。
- 4) 囑累品は、*idam avocad bhagavān* で始まる句を末尾に持つ (KN p.487) が、これは無量寿經・阿弥陀經・十地經などの梵本と共通する經典最末尾の定型句である。

『妙法蓮華經』「方便品」：以五濁惡世 但樂著諸欲 如是等衆生 終不求仏道（大正9卷10b09-10）

これらを比較すると、『正法華經』に於ける「至道」は『妙法蓮華經』の「仏道」に対応すると考えられる。「至道」を「至れる道（究極の道、最高の覚り）」と解すべきか、「道に至る」と解すべきかは、単純に決定しがたい<sup>5)</sup>。漢語としては前者の解釈が穏当であるかもしれないが、梵本の bodhāya という与格に対応していると想定するなら、後者の可能性も否定できないように思われる。いづれにせよ、この場合、「至道」は仏の覚りを得ることと思われる。そうすると、②の文は、寿量品が説かれたことによって、仏の覚りを得たということになるが、あまりにも利益の内容が過大であり、後述する①の内容と併せて考えるなら、発菩提心のことを意味するのかも知れない。

たとえば、先に挙げた諸品の中でも、以下に見るように観世音菩薩普門品では発菩提心の功德が説かれているので、②の文も同様の趣旨であると考えことは不可能ではない。

『正法華經』「光世音普門品」：仏説是普門道品、彼時會中八万四千人、至無等倫、尋發無上正真道意（大正09.0129c24-25）

asmin khalu punaḥ samantamukhaparivarte bhagavatā nirdeśyamāne tasyāḥ parśadaś caturaśītīnāṃ prāṇisahasraṇāṃ asamasaṃmāyāṃ anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau cittāny utpannāny abhūvan. (NK p.456)

『妙法蓮華經』「観世音菩薩普門品」：仏説是普門品時、衆中八万四千衆生、皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心（大正9卷58b05-07）

---

5) 「至道」を「最高の覚り」と解しうることについては菅野博史教授よりご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

このように解した場合、②の文の「解脱至道」における「解脱」と「至道」の関係はどう考えればよいであろうか。一つには、「解脱=至道」と解することが可能であろう。もう一つには、「解脱」と「至道」とを別のものと解する可能性がある。これについては、①の文で述べられている三乗説と関連させて、声聞・縁覚が「解脱（涅槃）」、菩薩が「至道（仏の覚り）」と解することもできるかも知れない。

『正法華經』における「至道」の用例のうち、もう一つ取り上げたいのは、「往古品」の例である。

『正法華經』「往古品」：為説苦本是為苦諦。至習尽道。由是尽苦。苦尽至道（大正9巻91c03-05。「習」は宋・元・明三本では「集」）

yad idaṃ duḥkham, ayaṃ duḥkhasamudayo, 'yaṃ duḥkhanirodha, iyaṃ duḥkhanirodhagāminī pratipad āryasatyam iti. (KN p.179)

『妙法蓮華經』「化城喩品」：謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道（大正9巻25a03-04）

これらを比較すると、「往古品」における「苦尽至道」は duḥkhanirodhagāminī pratipad āryasatyam に対応することが分かる。そうすると、漢語の通常の文法からは逸脱するが、「苦尽至道」は「苦の尽に至る道」と解した方がよいのかもしれない。もしそのように解することが可能であるなら、②の文の「解脱至道」は「解脱に至る道」と解しうる余地があることになる。この場合、「解脱」は単に二乗も達しうる涅槃ではなく、成仏も含意していると考えた方がよいかもしれない。

②の文で説く功德の具体的内容については確定することが困難であるが、以上いくつかの可能性を挙げて考えてきたところからすると、成仏にかかわることが功德の内容とされていると考えてよいように思われる。

先に挙げた、功德を説く結びの文を持つ諸品は、いずれも（法華經全体ではなく）当該の品を聴聞した功德を説くもの<sup>6)</sup>で、その意味で法華經本体からの独立性が高い品である。実証は難しいが、それぞれがもともと単行の經典であった可能性もある。『正法華經』から考えるなら、寿量品もそれら諸品と同様の形態を示しているのであるから、もともと単行の經典であった可能性も否定し切れない。法華經の展開の中で見れば、宝塔品での釈尊の呼びかけを受けて、從地涌出品で大地から未知の菩薩たち（いわゆる地涌の菩薩）が出現し、彼らを教化した次第を語るために寿量品が説かれるという筋書きであるが、不思議なことに寿量品

- 
- 6) ただし、『正法華經』「妙吼菩薩品」は、「正法華經」を聴聞したことの功德を説く。一方、梵本対応箇所『妙法蓮華經』「妙音菩薩品」では当該品を聴聞したことによる功德となっている。

『正法華經』「妙吼菩薩品」：四万二千天子、聞正法華經、皆悉逮得無所從生法忍。蓮華首菩薩逮正法華定（大正9卷128c12-14）

asmin khalu punar gadgadasvarasya bodhisattvasya mahāsattvasya gamanāgamanaparivarte bhāṣyamāṇe dvācatvāriṃśatām bodhisattvasahasrāṇām anutpattikadharmakṣāntipratilambho 'bhūt. padmaśriyaś ca bodhisattvasya mahāsattvasya saddharmapuṇḍarikasya samādheḥ pratilambho 'bhūt. (KN p.436-7)

『妙法蓮華經』「妙音菩薩品」：説是妙音菩薩來往品時、四万二千天子得無生法忍。華徳菩薩得法華三昧（大正9卷56b28-c01）

なお、asmin から bhāṣyamāṇe までは、結びの文の定型句であるが、（妙莊嚴王本作品を除く）他の品では聴聞の対象は、品名と一致しているので、ここでの gadgadasvarasya bodhisattvasya mahāsattvasya gamanāgamanaparivarte という表現は “Gadgadasvara-parivarta” という品名と一致せず異例である。なお、妙莊嚴王本作品の場合は、śubhavyūharājapūrvayogaparivarta という品名を、結びの文では pūrvayogaparivarta と省略している。実は、pūrvayogaparivarta は化城喩品と同名であり、少なからぬ問題がある。また、ここで bhāṣyamāṇe という表現が用いられているが、これは妙音菩薩品と妙莊嚴王品だけに見られ、陀羅尼品・薬王菩薩本作品・観世音菩薩普門品・普賢菩薩勸発品（および寿量品 = 分別功德品の②）は nirdiśyamāṇe である。ここにも考えるべき問題があるが、後考を俟ちたい。



では、地涌の菩薩については全く触れられない（しかも、弥勒の問いの主眼が過去世の問題であるのに対して、寿量品で主として語られるのは、仏の常住とその涅槃の意味であって、問いと答えが微妙に噛み合っていない）。寿量品の前後の諸品は寿量品を前提としているが、寿量品の内容はそれらからは自立しており、寿量品が先にあって、その前後に諸品が増広されたと考えerことは十分に可能と思われる。

また、②に対応する梵文では、寿量品を指して、*tathāgatāyuspramāṇanirdeśa* と呼んでいる。これは他品の同様の結びの文が全て当該品を ……-*parivarta* と称しているのとは大きな違いである。維摩經の梵語題名が、*Vimalakīrtinirdeśa* であることを考え合わせると、寿量品の独立性を示唆するものとも考えられる。もっとも、五百弟子受記品の冒頭では、方便品を指して、*upāyakaūśalyajñānadarśana saṃdhābhāṣitanirdeśa* (KN p.199) と呼んでいるし、随喜功德品の梵語題名は *anumodanāpuṇyanirdeśaparivarta* なので、単に *nirdeśa* は教示の仕方を示すに過ぎず、品の独立性を示すものではないかも知れない（もっとも、方便品と寿量品だけが *nirdeśa* と呼ばれていることは重要である）。

一方、分別功德品の梵文では、*tathāgatāyuspramāṇanirdeśadharmaparyāya* (KN p.327, l.3, p.332 l.6) や、*tathāgatāyuspramāṇanirdeśaṃ dharmaparyāyaṃ* (KN p.333 l.1-2, p.337 l.3) といった表現が見られ、法華經が自らのことを *Saddharmapuṇḍarīka dharmaparyāya* と称していたり、序品において釈尊と過去世の日月灯明仏が共通して説く經典の名前が、*mahānirdeśa nāma dharmaparyāya* (KN p.5 l.8, p.19 l.12) であったりすることは、*dharmaparyāya* という言葉の用法の上から、寿量品の独立性を示唆しているようにも思われる。

寿量品がもともと単行經典であったとするなら、どのような理由で法華經に編入されたのであろうか。漢訳『薩曇分陀利經』の存在からするなら、法華經の原初形態は現行見宝塔品の一部と提婆達多品であった可能性がある<sup>7)</sup>。見宝塔品の本来の趣旨は、既に涅槃に入った多宝如来が再び出現し、釈尊の過去世の

7) この説を最初に述べたのは渡辺照宏であるが、塚本啓祥・伊藤瑞叡らは否定的である。これら諸説を検討し、渡辺説の再評価を行ったものとして、下記参照。前川健一「『薩曇分陀利經』と法華經」、『仏教学』56号(2014年)。

菩薩行を讃嘆し<sup>8)</sup>、それに応じて提婆達多と釈尊との関係が開示されることにある。このように見宝塔品で多宝如来の常住が説かれるのに対し、釈尊の常住を説くために寿量品が編入されたと考えることは可能であろうと思われる。

#### 4 「如来現寿品」における譬喩の解釈

次に①について検討したい。①は、譬喩の解説（いわゆる「合喩」）である。①の文では、良医の譬喩を以下のように解釈している。

父である医者

：如来

子どもたち

：五道（地獄・餓鬼・畜生・人・天）を輪廻している人たち

父が他国にいて不在

：如来がまだ世間に出現していない

子どもたちが市街（城）に入って<sup>9)</sup> 毒を飲んで転げる

：三界で三毒に束縛され、五道に転じ、自分で脱することができない

父が聞いて帰還する

：如来は憐れみを覚え、三界の人々が五趣（五道）に流転し脱することができないのを見て、世間に出現し、教を詳細に説き、人々を啓蒙する。

薬を服用して病気が治る

：菩提心を発して、不退転・無生法忍を得る。声聞や縁覚となり、究極に

---

8) 床上有坐仏。字抱休羅蘭〈漢言大宝〉歎釈迦文仏言、「善哉、善哉。我般泥洹已來、過恒迦沙劫恒迦沙仏刹、止於空中。恒迦沙仏以過去。我歷爾所劫、初不還彼刹。我見、釈迦文仏精進求仏道、用人民故、布施無厭足、不惜手、不惜眼、不惜頭、不惜妻子象馬車乘、不惜珍寶、無有貪愛心。我故來出。欲供養釈迦文仏并度諸下劣」(『薩曇分陀利經』、大正9卷197a15-22)

9) 譬喩の方にも「子在城中腦發邪想」(大正09.0114a15-16)とある。これは梵本では、*te cāsya putrā tena gareṇa vā viṣeṇa vā duḥkhābhir vedanābhir ārtāḥ* (KN p.320)に相当するが、*tena gareṇa*の部分を*nagare*と誤読したものと推測される。

は至らない場合もある。

薬が見かけも良く香も味も良いのを見ながら服用しない

：六十二の誤った見解に陥っている。

父が年老いていることを告げ、薬を置き、子供に教えて、子を捨てて去る

：人々は教えを受けることに疑問を持つので、涅槃を示し、教えを留めて、後世の人に教える。四衆（出家・在家の男女）はそれを読誦し学んで、仏の功德を思い、菩提心を発する。羅漢になる者や、縁覚になる者もいる。仏は、こうした様子を見て、再び世間に出現する。

ここで問題になるのは、これが竺法護の訳した原本にもともとあったのか、原本には無く竺法護ないし後人が補足したものであるのか、という点である。法華經の他の譬喩では、合喩の部分があるが、寿量品にはそれに当たる部分がないので、竺法護ないし後人が補ったという可能性は否定し切れない。もっとも、全般的に竺法護の訳文は直訳的なので、竺法護本人が補ったとは考えにくい。他の誰かが補った可能性を完全に否定することはできない。逆に、合喩がないのは不自然なので、もともと寿量品には①のような合喩の文があったが、何らかの事情で『妙法蓮華經』や現存梵本では脱落してしまったという可能性もある。

②の場合とは違い、梵本を参照しても直接的に有力な情報は得られないので、①の内容から考えていくことにする。

先に示したところから、①が良医の譬喩を、三乗説を前提として解釈していることが分かる。これは法華經の中の文言としては特に問題がないように見えるが、寿量品そのものには三乗説は何ら説かれていない。いささか気になるのは三乗に対する一乗が、①の説明では明確に説かれていないことである。もっとも、あくまで仏の涅槃が方便であるという主旨を明確にするため、一乗・三乗の問題には踏み込まなかったと考えられるかも知れない。

①では、輪廻する衆生を「五道」「五趣」と表現している。『正法華經』では、「五道（五趣）」と「六道（六趣）」とが混在している（『妙法蓮華經』では「六道」「六趣」

のみ)。これによって、①が『正法華経』の訳文と不整合ではないことは分かるが、『正法華経』が依拠した原本に①がもともとあったのか、①が『正法華経』をもとに竺法護ないし後人が付加したのかは決定できない。もっとも、「五趣」の語はここしか使われておらず、残りは全て「五道」である。以下に見るように、「五道」「五趣」は、いま問題にしている箇所を除けば、薬草喻品（『妙法蓮華経』には無い後半部分のみ）・化城喻品・随喜功德品<sup>10)</sup>に見られる。

「薬草品」（薬草喻品）：五道生死菩薩縁覚声聞（大正9巻85a22）

同上　：人在生死五道陰蓋（大正9巻85b27）

同上　：度於三界省練五道（大正9巻85c13）

同上　：人本亦如是無三界五道　隨行而隨生　展轉不自覺（大正9巻85c28-29）

「往古品」（化城喻品）：其導師者謂如来也。大曠野者謂五道生死（大正9巻92c19-20）

「勸助品」（随喜功德品）：使五道人有五蓋者通得相見（大正9巻118a14）

同上　：一切五道猶如芭蕉　速令逮及於滅度事（大正9巻118c12-13）

一方、「六趣」・「六道」は以下の品にある（「六道」は1箇所だけ）。

「光瑞品」（序品）：彼此世界六趣周旋（大正9巻63c09）

「勸助品」：六趣群生未盡羅網（大正9巻118a17）

「歎法師品」（法師功德品）：三千大千世界諸六趣生（大正9巻122a23）

同上　：六道之中所有黎元是等思想　若干種念（大正9巻122b08-09）

①では六十二見が説かれるが、これも『正法華経』の中に見られる（「薬王如来品」の例は『妙法蓮華経』・梵本には無い薬王如来の過去世を説いた箇所にあるもの。「薬草品」の例も、『妙法蓮華経』には無い箇所）。

10) このうち、「勸助品」（随喜功德品）の最初の用例は、『妙法蓮華経』（大正9巻46c04）・梵本（KN p.346）と対比すると、誤読による誤訳の可能性もあると思われる。

「善權品」(方便品)：具足依倚 六十二見 当住於斯 根著所有(大正9卷70c17-18)<sup>11)</sup>

「藥草品」：貪婬瞋恚愚痴六十二見、謂四病也 (大正9卷85c08)

「授五百弟子決品」：其土無有九十六種六十二見憍慢羅網(大正9卷95c29-96a01)<sup>12)</sup>

「藥王如來品」(法師品)：大慈大悲 降伏衆魔 六十二見 自然為除 (大正9卷100a29-b01)

これに関しても、①の文が『正法華經』と齟齬しないことは分かるが、後補か否かは決定できない。

ただし、以上の検討から、①の文は、五道・六十二見が共通していることから、以下に示す藥草喩品の後半の譬喩(盲目の人が藥草によって目を開く話)と関連が深いことは分かる。もっとも、これまた、①が後補か否かを確定するには至らない(『正法華經』「藥草品」の訳文による)。

仏言、如是当解此喩。

人在生死五道陰蓋。不了本無則名曰痴。從痴致行、從行致識、從識致名色、從名色致六入、從六入致更、從更致痛、從痛致愛、從愛致受、從受致有、從有致生、從生致老病死憂惱苦患。罪心集會、故謂盲冥。

是以世尊愍傷其人升降三界輪轉無際不能自拔。觀於衆生心之根原、病有輕重、垢有厚薄、解有難易。觀見遠近、便見三乘。

發菩薩心、至不退轉、無所從生、徑得至仏、猶如有目、得為神仙。

其良医者、謂如來也。

不發大意、謂生盲也。

貪婬瞋恚愚痴六十二見、謂四病也。

空無想無願向泥洹門、謂四藥也。

11) 『妙法蓮華經』「方便品」：入邪見稠林 若有若無等 依止此諸見 具足六十二 (大正09.0008b16-17)

12) 『妙法蓮華經』「五百弟子授記品」：無諸惡道 (大正9卷27c25)  
……apagatapāpam bhaviṣyaty…… (KN p.202 l.4-5)

薬行病愈、則無有痴、名色六入所更痛愛受有生老病死憂惱苦患皆悉除矣。  
志不作善、亦不在惡。

如生盲者、還得兩目、謂声聞緣覺生死已斷、度於三界、省練五道、自以  
通暢、莫能喻者、臨欲滅度。仏在前住、誨以要法、発菩薩意。不在生死、  
不住滅度。解三界空十方一切如化如幻如夢野馬深山之響。悉無所有、無  
所希望。無取、無捨、無冥、無明。

爾乃深觀、無所不達、見無所見、見知一切黎庶萌兆（大正9卷85b26-c18）

ということで、①が『正法華経』の原本にあったことは確定できないが、仮  
に原本にあったとすると、法華経の前半部（一乗説が主題となっている部分）と後  
半部（法師品以後の部分）をつなぐものが①である可能性がある。現行の法華経  
を序品から順に読んでいくと、前半部とそれ以後の部分との断絶がかなりある  
が、先に述べたように、仮に寿量品がもともと単行経であったとすると、寿量  
品の①の部分で三乗説が触れられたことがきっかけとなって、一乗説を主題と  
する前半部が増広ないし付加されたと考えすることはできよう。支謙訳の經典に  
「仏以三車喚経」があるとされており<sup>13)</sup>、譬喩品の単行經典と考えられている<sup>14)</sup>  
が、そうした単行経が宝塔品を中心とする法華経の原初形態に付加されて、増  
広を重ねて現在の法華経の前半部が形成されたのではないであろうか。もとよ  
り検討の余地は大いにあるが、一つの仮説として提示しておきたい。

## 5 むすび

『正法華経』「如来現寿品」にのみ見られる二箇所（①②）について検討を  
行ってきた。②（品末の文）の検討からは、寿量品が本来独立經典であった可能  
性が示唆された。①（良医の譬喩の解説）については、この部分が竺法護の訳し  
た原本に存在したのか、漢訳時の補入であるかは確定できないが、薬草喩品後  
半の譬喩と共通する思想背景にもとづいていることは示すことはできた。また、

13) 『歴代三宝紀』巻五（大正49巻58c03）、『大唐内典録』巻二（大正55巻229b11）など。

14) 布施浩岳『法華経成立史』（1967年改訂版〈1924年初版〉、大東出版社）29頁。

仮にこの部分が原本に存したものである場合、良医の譬喩を三乗説と結びつけていることが注目され、一乗説を説く法華経前半部との関係を検討する必要がある。これらの問題をさらに検討するためには、①の部分に見られる「五道」の問題や、鳩摩羅什訳には存在しない薬草喩品後半をどのように位置付けるかといった問題についても考察する必要があるだろう。これらについては、後考を期したい。

※テキストの検索・引用にあたり、SAT（大正新脩大蔵経テキストデータベース）及び GRETEL（Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages）を利用しました。